

ゆきつ しきみ
雪積む櫛

馬場 駿

寒中のわりには暖かい日だった。西高東低の気圧配置が大崩れをしたらしい。コーポラスの三階から見るといつもの景色が陽光をたっぷり受けて輝いている。遠い山々が霞み、浮かんでいる雲さえ半ば橙色に染まって春を思わせる。

「それ終わったらコーヒー頼むな、自分で淹(い)れろと濃さが変なんだ」

「きよう本を整理するって言ってなかった？」

炬燵(こたつ)に戻ろうとする私に、妻がベランダで洗濯物を干しながら言った。

出張先に置いてある書籍類が還ってくる。あと一と月で六十五歳、定年で仕事が終わるのだ。老夫婦だけの小さな年金生活が始まる。そう思っただけの本棚を一つにしてしまった関係で、出戻り本の収納場所が無い。もう二度と読まないものや、長年月を

経て用をなさなくなった資料などを資源ゴミとして出す必要があった。

「そう、なんだけど…」と、処分をためらう自分がグズグズと居座っている。

書籍というものは、購入して傍らに置いたときから特別なものになる。書店に並んでいたときは違う何か、「関係」として生まれるのだ。実際に紐解いたり、学んだりすればその絆はより深くなる。自分が作者や編集者ならなおさらだ。

そんなことを想いながらも観音開きの扉を開けて、最上段から一冊ずつ、指で背表紙に触れていく。

本棚の二段目の色褪せた朱色の小冊子――

レザックの背表紙にタイトルがやつと刷れる程度の厚みで、分厚いハードカバー本の間に遠慮がちに挟まっている。タイトルは平仮名で『しきみのよう』に『平成元年十二月に逝去した母、雪の自伝だ。享年七十四。仲良しの貧乏神と一生連れ添うことになった女の、前半生がこの中に遺されている。』

引き出して左掌に載せてみた。書籍用紙で九十三頁なので、比較的軽い。

『重かったけどな、あの原稿用紙は…いや、内容も、編集も…』

懐かしい冊子をパソコンの前に置いて、自作の編集後記を開いてみる。

からからからつというサツシ戸が締まる音が、それに重なった。室内の空気が小さく渦巻いたような気がした。

『一周忌に配布すべく編集にかかりながらとうとう三回忌ぎりぎりの発刊となった。ひとえに私の怠慢に因るが弁解が許されるなら一言発したい、

「これ以上はないというほど困難な作業だった」と。長兄から母の遺稿を手渡され、本にして欲しいと依頼された私は、一読して正直なところ途方に暮れた。

「自分で」と題された母の遺稿は一つではなかった。四百字詰原稿用紙百二十八枚に及ぶ第一稿と、その改訂稿とも言うべき六十七枚の第二稿があり、それぞれが異質な香りを放っているばかりではなく読み比べていくうちに相互に矛盾する叙述に幾度か遭遇

したのである。私は先ずどちらの作品を基本として編集していくのかで迷った。文章の出来で選ぶなら第二稿であり、めちゃめちゃではあっても心情の吐露の完全さで、文章のボルテージの高さで選ぶなら第一稿であった。

結果的に私は、本作品の前半では第一稿を、後半では第二稿を採るのだが、ここで母の作品(原作)の文章上の特徴を羅列しておこう。

先ず、句読点が全く無い。文章に段落というものが無い結果、行変えという操作をしていない。分かりやすく言えば原稿用紙のマスは全て字で埋め尽くされている。台詞のルール(「」又は『』)に従わず直接話法の形で無造作に文中に入っている。加えて主語、述語の欠落が目立ち、文章の前後がかみ合わないところへもつてきて、意味上の倒置法を多用し、本人にしか分からない事実を一方的に省略しているの、第三者は立ち往生せざるをえない。接続詞は皆無に等しく、誤字、脱字、あて字が氾濫している。

それにもかかわらず、否、そうであればなおさら

に、母の無知、苦惱、逡巡、善意がせつせつと胸に迫り涙をきそうのは不思議である。』

「駿、これ何て読むの？ どういう意味？」

いったい何回問われただろう、この母に。

かつて一世を風靡した漫才のミヤコ蝶々が上方トロンボに「何とゆう字？」と何度も訊いたことから相手の芸名が南都雄二（なんとゆうじ）に改まったという逸話は有名だが、私も母にとつては同様な存在だったのだろうか。当用漢字を読めるといっただけでは応えきれないと悟った私は、母が差し出す単行本や学会雑誌、宗教新聞そのものを読破するようになった。当時の新興宗教に関するものだけに、日蓮の「御書」をはじめ仏教用語の数々、歴史上の人物の名や官位名・職名といったものまで調べる羽目に陥っている。一体が罰当たりなので、長じても宗派の折伏（しゃくぶく）に理論的に抗して宗教的中立を護つてはいたが、母のお陰で信者に匹敵する知識を蓄えてしまった。もっとも小学校一、二年の頃までは母に従って朝の勤行（こんぎょう）もしていた。母が私を

傍らに座らせ拝ませるときに殺し文句は、「丈夫になる」と、「頭が良くなる」の二つだったと記憶している。このいずれのご利益も時を経て、自分自身でその存否を判定することではあるまい。

そう言えば、ずっと蟠（わだかま）っていたことがある。勉強とか、学問とか、教育とか、そういうものに母は、表面上全くと言つてもいいほど関心を示さなかったが、実際はどうだったのかということだ。試験で満点を取つても、毎年委員長になつても、児童会長になつても、何に表彰されても、「それがどうした」という顔で通した母。成績の通信票などは出しても見向きもしなかった。「自分でハンコ押しな」と認め印のある場所を指差すだけなのだ。中学生になるとさすがに私も諦め、何も報告しなくなつた。生活に追われ、それどころではないのだろうと勝手に納得もした。「いい成績なのになあ」と私は、口を尖らせて校庭の隅で空を見上げた。記憶がある。「勉強しろ」とか「宿題やったか」といった類の台詞を一度も吐かなかつた母の真意が奈辺（なへん）にあったのかは不明だ。一方、大工だつた父には名言がある。

「教室で先生に習ってまた家で勉強してるってのは頭が悪いからか」。これを聞いてから私は、家での予習、復習や試験準備を一切止めている。

昭和三十九年県立高校一年の秋、父が何度目かの脳溢血で倒れた。父は塩を嘗め嘗め冷酒をあおるような男だった。

私は思い詰めて確かこんな質問をした。

「大学まで行かせてくれるの、どうなの？」

針を動かし繕(つくろ)い物をしていた母は、私の顔も見ずにただ黙りこくっていた。そんなこと聞くほうが可笑しい、とでも言うように。否定を伝えるには最も有効な対応だった。

結局私は、寝たきりの父の「義務教育は終わったんだから働いて食い扶持(くいぶち)を入れろ」という言葉の間接的に知らされて愕然とし、その年の暮を待たずに、任意退学をしている。あえて言えばこのときの学級は選抜クラスだった。決断した場面でも母のコメントは何も無かった。胸の中で名状しがたい虚しさが渦巻いたのを憶えている。

「独学とアルバイト生活の二十年」はこのときか

ら始まる。

「コーヒー淹れたよ」

頭のなかを現在(いま)に戻す言葉だった。

鉛筆を葉代わりに冊子に挟んで私は、妻の側に座った。

「明日、みさきのところに行ってくる」

「うん、一年以上会ってないなあ、俺は」

三歳になつてゐる孫の顔は写真でしか知らない。

「おとなみたいなきくよ、頭いいのかも」

「大人の真似をするからこどもなんだ。傍にいる大人は親だから、口調が親そっくりになる」

だから可愛いとも言える。水を注すようだが頭の良し悪しはこの段階では判らないものだ。真似の速さや記憶力などとは本来無縁のものだからだ。他人との関係の捌(さば)きの中にこそ現われる。そう思う。

「コーヒーの淹れ方、うまいな、相変わらず」

「またまた」

そう言いながらも笑顔で「おかわりでしょ」と妻が腰を上げる。

「親はさ」

「え？ 何」

湯沸しの音で、つぶやき調の声ではよく聞こえないのだろう。

「寄り添って、信じて、褒めてやることだよ」と大声を出した。

そうすれば子供は、親の想いから大きく外れたりはない。だから学齡前の親子の大事な時期を、可愛がるだけの爺婆が邪魔をしてはいけなないと、そう思う。変わり者の発想かもしれないのだが。

「可愛くば五つ教えて三つ褒め、二つ叱って良き人とせよって言ってるね」

「標語みたいね、語呂が良くて」

「そのとおり。四十年ほど前に運送のバイトをしていて湘南の道路で見たんだ」

「すぐメモしたとか」

「うん、あとでミソ帳にもシツカリ書き留めた」

「そういうとこ普通じゃないな、やつぱり」

禁止と命令だけというのは親の愚行でしかない。無視・無関心は最悪の罪とさえいえる。これも私の

持論だ。

「学校の先生、似合うかもね、もう遅すぎるけど」
妻が首をすくめて笑った。

母は私を無視したのだろうか。自伝の中に出てくる「私」は二行だけだった。糞か）てて加えてそれが出てくる頁も、何と四四。縁起も悪い。

『その頃三男が生まれました。あぶなく三男を忘れるところでした。昭和二十二年四月九日、六人目の子です』

その忘れそうになった子が、自伝の編集をしたとは、泉下の母も苦笑しているのではないか。

（いや、違うかも……）

遠い記憶を辿った。

そうだ、母の自伝がいつの間にか分厚くなったのを見て、私が「本になるねえ、この分量なら」と言ったときだ。

「きれいに書き直してただけだよ、そうしとけば、いつか誰かが読んでくれるだろう」と、皺が目立ってきた小さな顔を、悪戯っぽく崩した母。

その「いつか誰か」の初めが私になるだろうことを予測し、期待していたのではないか。「何とゆう字？」の相手は常に私だったのだから。

母のその想いが、死が来る前に自作を何冊か上梓して遺しておきたいという現在(いま)の私の想いに繋がっている。もしそうだとしたら……。

『母の作品の真意を過(あやまり)なく第三者に伝達すること、果たしてそれは可能なのか。私が筆を執っては攔(お)き執(と)っては攔(お)した事情はここにあり。しかし私は負けた。氣をとり直した。』

第二稿の終り頃に「目を瞑る」の字を見たときに、第一稿では書けなかった「一生懸命」の漢字を第二稿で見つけたときに、尋常小学校で終わった母が、仏典の解釈を自分なりに自分の言葉で叙述しているのを見たときに、もしかしたら母は、私の数倍の学問をしてきたのではないか。そうであれば私が母の作品を編めるわけがない。逆接に言うことがゆるされるならば、右の自覚が急速に私の筆を速めた。母の声を聞こうと思ったからである。当初百八十枚に

なると思っていた稿が九十一枚で終わったのも同じ理由に因る。

この作品は父の死亡によって終焉を迎えるべき、と思つたのである。夫への愛憎は相半ばして母の人生に彩りを添えた。それは余りにも激しく、余りにも極端であった。夫の行状に怒り首を絞めて殺そうとして子供に現場を見られ、朝が来るのが怖かつたという条(く)だり(は)文字面を追つただけでも哀しい。父の一周忌近く、母が狂つた事実を長兄と私は知っている。一年の歳月が父と母を限りなく近づけたのである。二人の間に生まれた息子でしかない私たちが二人が出来たことは母を病院に運ぶことだけであつた。あの場面で母が半狂乱の中で頼つたのは既に物故していた父であり、長兄でもなければ、ましてや三男の私でもなかつた。このことに気付いたとき私は、この作品の骨格を初めてイメージできたのかもしれない。』

昭和四十四年。

……初めて見る危うい姿だつた。私だけでなく、

長兄にとつてもそうだったろう。八畳間に置かれた二段ベッドの下段で、滂沱(ほうだ)の涙を流し、髪を振り乱して囁言(ささや)を繰り返す母は、確かに女だった。

(オヤジが迎えに来ている?)

子どもの目から見ても家庭人としての父は最悪の男だった。苦勞をさせられ続けた夫から呼ばれ、それに従おうとして自分が置かれた現実と戦っている。見せている狂態はその証だ。そんな気がした。

長兄が近所の内科医院に走った。
母と二人だけになったそのとき、私は一生忘れな
いであろう台詞を耳にする。

「駿、勉強しなよ、駿、勉強しなよ」

二度目は声がかすれて不完全だった。

(嘘だろうか? 何でいまなんだよ)

しばらくの間その場に立ち尽くした私。

毅然たる無関心、そうではなかったのか。だとしたらこれまでの「仕打ち」の意味は? 親に、家庭に對する怒りを熱源にして独学を続け、父が逝った昭和四十三年に文部省大学入学資格検定に合格した私、

その意味さえも覆す一言だった。

(おふくろが、いまさら勉強つて、何。いまさらだろう? ……何言つてんだ)

俄かに目頭が熱くなり何も答えられなかった。ただジツと母を見詰めて、医者が来るのを待った。

「脳軟化(脳梗塞)の疑いがあります。救急車を呼びましょう」と、往診に来た医師が言った。救急車の中で長兄と私は、迫り来る何かに囚われている母を凝視しながら、極度に緊張をしていた。

ところが運び込んだ総合病院の医師は診察後、救急隊員に質問されて明確に答えたのだ。

「何でもありません」

それでは困ると隊員に念を押されても、彼の確信は変わらなかつた。ある意味では「仮病」と診断されたことになる。

長兄と私が、「ちよつとこちらへ」と医師に呼ばれた。

「お母さんに、きょう、何かきついことを言いましたか? 所見自体はありません、精神的なものです、症状は全てそこから出ています」

身に覚えが無かった長兄と私はキョトンとして顔を見合わせた。

処置室に戻ると、身繕いをすませた母がベッドから降りようとしている。

落ち着いたいつもの表情になっていた。まるでカタルシスのあとのように。

(また放り出されてしまった)

ここでも私は、そう感じて横を向いた。

『亡父を、酒好き、女好き、怠け癖とごく大雑把に特徴づけることができるならば、亡母は、多産、貧乏、学会と特徴づけることができ、二人の属性は相互に因果の鎖で結ばれていた、と言えるかもしれない。』

ともあれ生涯赤貧洗うが如くであった母が逝って丸二年が過ぎた。この作品の読者の目から見れば母の一生は悲惨であり又凡そ無価値に思えるかもしれない。しかし母の作品は昭和四十年代で終わっている。八人の子供の抛りどころとなり、孫や曾孫の成長を見ていたその後の比較的平穏な歳月を母がどう感じていたかは知る由もないが、晩年長兄所有の山荘で

兄と過ごし人寄せをしてその輪の中心にいた母は幸せそうに見えた。』

平成元年、母が救急車で搬送された旨の電話連絡を受けたのは私が伊豆熱川に居たときだった。あたふたと横浜へ出かける用意をしている最中に、「あわてなくても良くなった。車中で息を引き取った」との第二報が来た。あとで肺線維症(間質性肺炎)が進行していたためだと知った。小柄な身体で食糧事情の悪い中八人も子どもを産み、貧乏暮らして長期間心身を酷使した母。おそらく内臓も骨も損なわれていたのだろう。遺体も驚くほど小さかった。

未だ六つか七つの頃だったと思う。朝、なかなか起きない母をゆすつて「なんで寝てるの、ごはんはー？」と言うと、「起きて動くとおなか空くだろ、お前も寝な」と返された。素直に従った私。父が酔っ払って給料袋を落とした翌日だったと、ずっと後になって聞かされた。そういえば、お金が無いと、きまつて山菜採りに連れて行かれた記憶がある。当時の横浜にはまだ田畑がかなり有り、小川にはタニシやザ

リガニもいた。せり(芹)、のびる(野苾)、たんぼ(蒲公英)、うど(独活)、果てはおおば(大葉子)にいたるまで。これらが御浸しや酢味噌和えとして惣菜に化けるのだ。さらに私の「しごと」は「おもらいくん」に変わる。近くの日用品市場に行つて、たとえば八百屋で大根の葉っぱを、豆腐屋でオカラを、ただで貰ってくるのだ。パン屋で食パンのミミをもらったこともある。売れずに捨てるものなのかどうか、店の人は何も言わないのに笑顔で包んでくれた。いまにして思えば、我が家の事情が知れ渡っていたということだろう。「子どもに罪はない」との発想だ。私も恥ずかしいという感覚は無かった。

生まれつき蒲柳(ほりゆう)の質だった私は「日陰のモヤシ」と渾名され激しい運動を禁じられていて、いつも家の周りに居た。つまり母の近くに居た。そのせいで、家事の手伝いをするが多かった。実質はただのお邪魔虫だったに違いないのだが。洗い張りや打ち返し綿での布団再生が、なぜか記憶に残っている。褒美なのかどうか、たいていの場合、「作業」のあとで陽の当る縁側で耳垢をほじくってもら

えた。まぶしいから目を瞑る。言葉も映像も無い心穏やかな時間と空間がそこにはあった。

洗濯機のパルセーターが作り出すゴオンゴオンという騒音が気になつてきた。

「ねえ、まだ終わらないの、洗濯」

「もうちよつと」と妻が居間に顔を出した。

「けつこうかかると、きょうのは」

「そつちこそ、一冊の本にもう一時間。はかどる片付けですこと」

それもそうか、と首をすくめた。

(もしかしたら母と過ごした時間が一番長い子どもは俺かもしれない)

昭和二十から三十年代、中学卒業もそこそこに奉公や住み込み仕事に出された姉たち、兄たち。その後ほとんど家の外からの接触になつている。確かに「時代」の悪戯がそこにはあったろう。しかし、根本原因は貧困だ。とくに八畳と三畳間しかなかったボロ家に父が寝たり起きたりの闘病生活をしていた

十数年間は、ほとんど誰も寄り付かなかつた。かく言う私も女友たちの「お宅」が居心地良く、勉強になることも多かつたので、暇さえあれば通つていた。医師、歯科医師、教師、会社社長、警察官など、出入りする大人たちの職域の広さ、会話の端々に溢れる教養。自分とは別世界に居る男女学生たちが織り成す青春模様。垣間見る茶の湯、絵画、生け花などの稽古事の世界。その中に身を置く意味、それはきつと、暗く貧しい家からの逃避……そうではないと言い切る自信は今も無い。

ある日茶の間で二人きりになったときに、友人の母親がしみじみとした口調で言った。

「おかあさまは寂しいでしょうね。なんだかうちが駿君をとつちやつたような感じだから」

（おふくろは俺には無関心）と決め付けていた当時の私は、折角の忠告を心の中で笑殺している。

（寂しいなんて、そんなはずない）

馬場の家には自分を高める何ものも無い。

——心底、そう思つていた。

『私は思う。母の一生は、常に葉を繁らせながら目立たず、花を咲かせて小さく、また実を結んで人知れず、焼いてほのかに香煙を放つ、まことにしきみ（秘・しきび）のようであつたと。』

最後に。文章整理と校正では母の原作の息吹を損ねないよう最大限の注意をはらつたつもりだが、母の言わんとするところが第三者にも分かるようにするため公分からなければ出版する意義は半減する、所によつては筆を加えざるをえなかつた。読者のご了解をえたい。（馬場駿）

「またお茶？」

「まあ、そう言うな、なんだかいろんなこと、思い出しちやつてね」

確かに片付けは全然進んでいない。いや、勝手気ままに生きた父は簡単に片付けたが、母への想いや疑念は、高齢になつた今も、整理がついていない。換言すれば、母はまだ私の中では死んではいない。

「おかあさんの自伝だつて、ずっと見てる本」

「うん、まだ正体が解からない人なんだ」

不謹慎な言い方だ。分かっているが適切ではある。急に妻が笑顔になった。

「何、その笑い……」

「手にかかる子ですけど、よろしくおねがいします」

「あ、横浜へ行っておふくろに紹介したときか」

「そう、二十八九の息子のことだから可笑しくて。からだが弱くて心配し続けたってこと？」

いや、中学生になつてからは柔道に精出すほどに丈夫だった。その後もケガこそすれ大病は患っていない。むしろ三十五歳過ぎまで、アルバイトと独学を続けたこと、つまり定職に就かず経済的に不安定だったことが大きいのだろう。

「ふつうの半生じゃないのはおかあさんと一緒ね。誰にでもできることじゃないし」

「結果が全てだから、褒められた半生じゃないさ。とくにおふくろにとつてはね」

同じアルバイトを四年近く続けて貯金し、一年半、食うや食わずの山籠り生活をしてようやく司法試験二次論文式に辿り着いたときも母は、言わば眉一つ動かさず、笑顔の欠片も見せなかった。

(金を稼がない子は悪い子なんだ、この人にとつては親と家庭への反発心はさらに硬くなった。)

結局青雲の志はこの年で雲散霧消する。張りも金も全く無い夏の暑さが忘れられない。

ただ自身が老いの境地に立つてみると、少し違うような気がしてくる。

数年前、東北の同人誌の主幹と文通したことがある。何かの折に「家庭環境」についての想いが相互に語られ、結果、「しきみのように」を寄贈することになった。彼の人は齡八十、名門K大学出の文士だった。母や私とは天と地ほどに環境が異なる。一と月ほどして長文の書簡をもらった。

「君は大いに勘違いをしている。これほど立派なお母さんをお持ちながら、一体何が不足なのだ」

思慮深いはずの彼が不肖の息子を叱るような口調で諄々(じゅんじゅん)と説いている。大人同士のマナーなどこ吹く風の立ち入りように私は啞然とした。次いで反発がきた。

「地方の名士、乳母日傘(おんばひがさ)で育ったあなたに何がわかる」

その後二回ほど型どおりの交信はあったが、自然な形で関係は終焉を迎えた。そうだ。問題の書簡の末尾はあたかも坊主だった。『吾唯足知』(われただたるをしる) 傍目八目という。彼には母と私の関係が読めていたのかもしれない。つまり、母の、褒めたり励ましたり出来ないほどの親としての負い目と、私の、折々に期待している旨の一言さえあればもつと頑張れたという子としての甘えを。そして最後には、いつも、いくつときも、責められるのは私という現実を。

彼が私への通信を止めた理由。それが「逝去」かもしれないと気付いたのは、ごく最近のことだ。慙愧(ざんき)の至りと言える。母の「自伝」の奥底にあるものを見つけた彼の大きさに、いまは感謝の気持ちで手を合わせている。

長い時間と思つたのに数分なのか。

妻が何か言っている。

「……それだけいろいろなものをもらっておいて、せいたく言わない。頭のいい人は悩みが沢山あって大変だね、わたしなんかとつても楽チン」

——そういえば私が中学生のころだったと思う。何

某によれば、私を養子に欲しがる老夫婦がいたらしい。暮らし向きは相当良い人だとのこと。八人も子がいた母だが、断つたという。理由は知らない。もちろん母は、そんなことがあつたなど、曖(あや)おく(び)にも出さなかつた。あらゆる求人が三十五歳までと制限つきだった頃、なかなか勤め先が見つからず、さらには当面の資金にもこと欠く危機に陥つた。薄暗い家で終日無為に過(こ)していたある日、母がぼそりと言つた。

「ほんとに、そっくりだよ、お前は」

私にはすぐに分かつた。怠け者の父に酷似していると罵られたと言つことが。よりよつてあの父に。

この家では、金は全知全能にして全ての評価尺度。そうとしか思えなかつた。母への小さな憎悪が芽生えたのを覚えている。

(あの親父に似てると言うなら狂つてみるよ、「駿、勉強しなよ」と口走つたあの日みたいに!)

「どうしたの、目が潤んでるよ。涙?」

妻が覗き込むようにして言つた。

「まさか、花粉だよ、花粉症」

「一月に? ……今度の休みでいいよ、整理」

「ああ」と小さくうなずいた私。

小学三年生のときに、「要擁護」の判定を受けていた私は、勉強しながら療養できる施設に半年間も入っていた。雑木林と畑と剥き出しの黒土が混在する景色のど真ん中に在る「学校」だった。月に一度の面会の日、同年代の生徒たちがベランダに出て、保護者が道の向こうに見えるのを待つ。親を見つけて手を振り、ベランダから次々に消える子ら。一人残され（また来ないんだ）と、両手で手摺を叩く私のはっきりと見えた。

そこには「…お金ないんだ」と納得する自分もいた。

あのときの気持ちのままですっと、最期まで、いや帛つてからも、待つていたような気がする。

——そう、潜在意識の中で。

背後で、サッシ戸を押す風の声が聞こえた。